





# ごん狐

## 新美南吉

「うわアぬ  
すと狐め」  
と、どなり  
たてまし  
た。 [ ]  
りしてとび  
あがりまし  
た。うなぎ  
をふりすて  
てにげよう  
としました  
が、うなぎ

### ANTENNA HOUSE

ほら穴の近くの、はん [#「はん」に傍点] の木の下で  
ふりかえて見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

[ ]、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっとはずし  
て穴のそとの、草の葉の上のせておきました。

十日《とおか》ほどたつて、ごんが、弥助《やすけ》というお百姓の家の裏を通りかかると、そこ、いちじくの木のかげで、弥助の家内《かない》が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋《かじや》の新兵衛《しんべえ》の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。 [ ]、

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何《なん》だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやがて来ますと、いつの間《ま》にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢《おおぜい》の人があつまっています

「兵十のお母は、床《とこ》について、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり [#「はりきり」に傍点] 網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。



だから兵十は、お母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままお母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちよつ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

# ごん狐

## 新美南吉



### ANTENNA HOUSE

「何《なん》だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

十日《とおか》ほどたつて、ごんが、弥助《やすけ》というお百姓の家の裏を通りかかると、そこ、いちじくの木のかげで、弥助の家内《かない》が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋《かじや》の新兵衛《しんべえ》の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。 [ ]、

[ ]、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一しょにかえっていきます。 [ ]、二人の話をきこうと思って、ついていきました。兵十の影法師《かげぼうし》をふみふみきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしやって、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

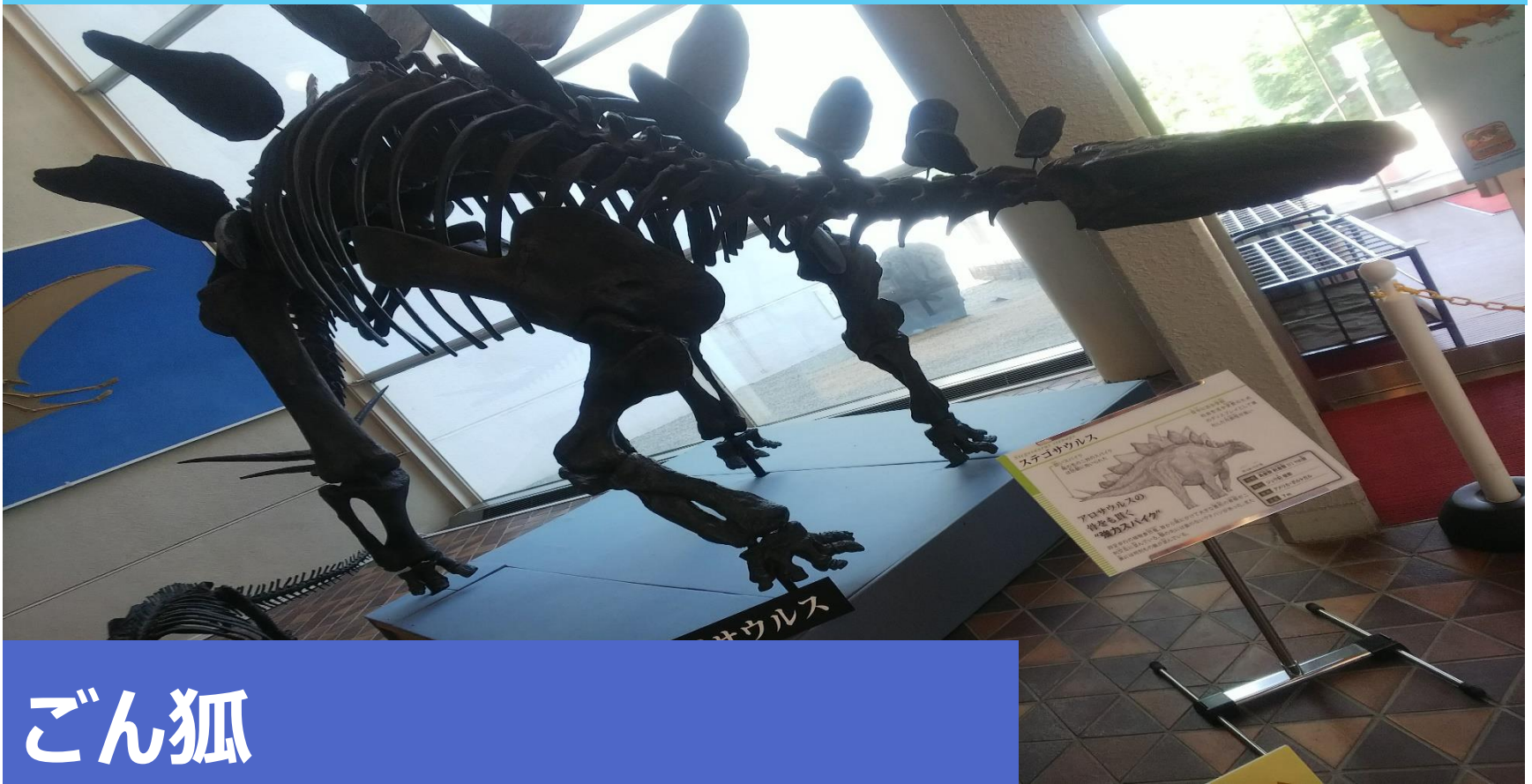
「うん」

「ええ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗や松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはおれをいわないで、神さまにおれをいうんじやア、おれは、引き合わないなあ。」

「うん」

「そうだとち。だから、まいにち神さまにおれを言うがいよ」

「そうかなあ」



# ごん狐

## 新美南吉

「せはぐ、死んだのせは十の骨の中《ふゆ》だ」

### ANTENNA HOUSE

お午《ひる》がすぎると、      、村の墓地へ行って、六地藏《ろくじぞう》さんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向うには、お城の屋根瓦《やねがわら》が光っています。墓地には、ひがん花《ばな》が、赤い布《きれ》のようにさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘《かね》が鳴って来ました。葬式の出る合図《あいず》です。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声《はなしごえ》も近くなりました。葬列は墓地へはいて来ました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

      のびあがって見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌《いはい》をささげています。いつもは、赤いさつま芋《いも》みたいな元気の良い顔が、きょうは何だかしおれていました。

兵十は今まで、おっ母と二人《ふたり》きりで、負いらくらしをしていました。おっ母が死んでしまっっては、もう一人ぼっちでした。

兵十が、赤い井戸のところまで、妻をといでいました。

「兵十のおっ母は、床《とこ》についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり【#「はりきり」に傍点】綱をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おっ母にうなぎを食べさせることができなかった。そのまもおっ母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだらう。ちよッ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

その晩、      、穴の中で考えました。

「いわしをおくれ。」と言いました。いわし売《うり》は、いわしのかごをつんだ車を、道はたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもってはいりました。      そのすきまに、かごの中から、五、六びきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向《むか》ってかけまじりました。途中の坂の上でふりかえって見ますと、兵十がまだ、井戸のうしろで妻をとごころのが小さく見えました。

「いわしのやすうりだ。いきのいいいわしだ。」

「いわしのやすうりだ。いきのいいいわしだ。」

# ごん狐

## 新美南吉

青空文庫作成ファイル

そのあくる日も      、栗をもって、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄《なわ》をなっていました。それで      家の裏口から、こっそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな

「ようし。」

兵十は立ちあがって、納屋《なや》にかけてある火縄銃《ひなわじゆ》をとって、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。      、ぱたりとたおれました。兵十はかけよって来ました。家の中を見ると、土間《どま》に栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落しました。

「ごん、お前《まえ》だったのか。いつも栗をくれたのは」

      、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は火縄銃をぱたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店  
1996（平成8）年7月16日発行第1刷 1997（平成9）年7月15日発行第2刷



初出：「赤い鳥 復刊第三巻第一号」  
1932（昭和7）年1月号



このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

# ごん狐

## 新美南吉

### ANTENNA HOUSE

これは、私《わたし》が小さいときに、村の茂平《もへい》というおじいさんからきいたお話です。

ふと眠るじ、川の中に人がいて、何かやっています。■、見つけられないものに、そのこと舞の舞い踊るくまきよつて、そこからはこのそいつみました。

「兵十《ひょうじゅう》だな」と ■ 思いました。兵十はぼろぼろの黒いものをまき上げて、腰のところにまで水にひたしながら、魚をとる、はりきり「#「はりきり」に傍点」といって、網をゆすぶっていました。はおまきをした顔の横ごちように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒字《ほくろ》みたいにくばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり「#「はりきり」に傍点」網の一ぱんうしろの、袋のようになつたところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれの葉や、ごちやごちやはいつていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふというなぎ「#「うなぎ」に傍点」の腹や、大きなきす「#「きす」に傍点」の腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきをすを、ごみと一しよにぶちこみました。そして、また、袋の口をしぼ

むかしは、私たちの村のちかくの、中山《ななかやま》というところの小さなお城が、あつて、中山をまわつておとのおまが、おられたのです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐《ごんこね》」とごん狐がいました。 ■

■、一人《ひとり》のぼろの小狐で、じだ「#「じだ」に傍点」の「ぼろ」はごん狐の森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも厚くも、あたりの村へ出てきて、いたずらはかりてました。はだけへ入って芋をほりちうじたり、菜種《なたね》が「#「がら」に傍点」の、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家《ひやくしやうや》の裏手につるしてあるとんがりしをむじりつて、いつたり、いろんなことをしました。

或《ある》秋《あき》のことでした。二、三日雨がふりつづいたその間《あいだ》、 ■、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでい

「ごん、お前《まい》だったのか。いつも栗をくれたのは」

■、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

雨があがると、 ■、ぼつとして穴からはい出ました。空はからりと晴れていて、百舌鳥《もず》の音がきんきん、ひびいていました。

■、村の小川《おがわ》の堤《つつみ》まで出て来ました。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少《すくな》いのですが、三日もの雨で、水が、どっとまわりました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩《はぎ》の株が、黄いろくにごつた水に横たおしになって、ちまれています。 ■ 川下《かわしも》の古ハト、めかるみみちを歩いていき

兵十がいなくなるじ、 ■、びよんと舞の中からしび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。 ■ びくの中の魚をつかみ出して、はりきり「#「はりきり」に傍点」網のかかっているところより下半《しもて》の川の中をながけて、ほんほんなげこみました。どの魚も、「とせと」と書を立てながら、じつた水の中へもぐりこみました。